日本現代文學全集 50

里見弴
長與善郎集

講談社

日本現代文學全集
50

里見　弴・長與善郎集

編集
伊藤　整
龜井勝一郎
中村光夫
平野　謙
山本健吉

初版　第1刷
昭和38年9月19日
増補改訂版　第1刷
昭和55年5月26日

¥2700

著者　里見　弴
　　長與善郎

裝幀　蟹江征治

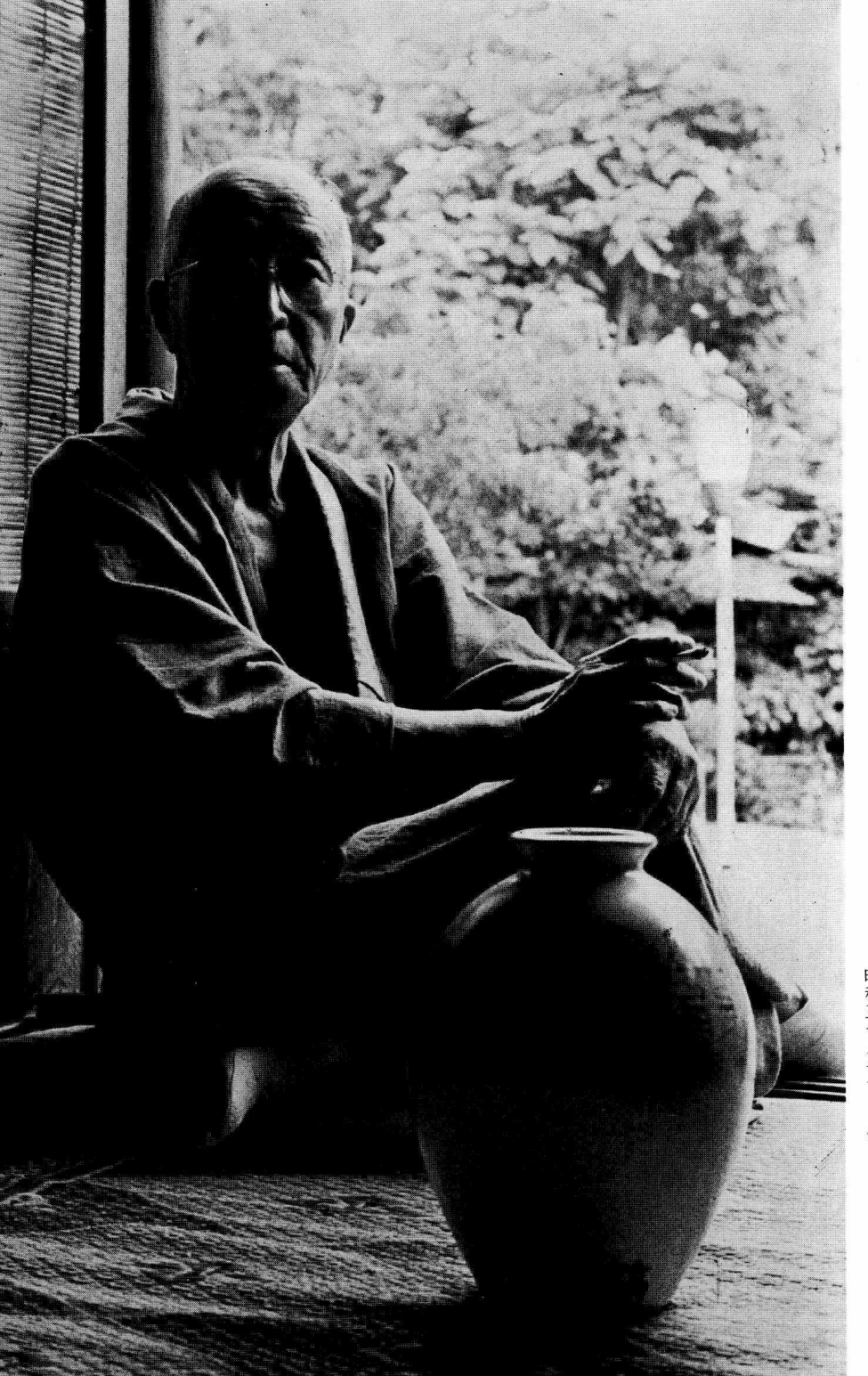
發行者　野間省一

發行所　株式會社　講談社
東京都文京區音羽2-12-21
郵便番號　112
電話東京03 (945) 1111(大代表)
振替東京 8-3930

印刷　信毎書籍印刷株式會社
製本　黒柳製本株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

0395-106508-2253 (2)　(文1)

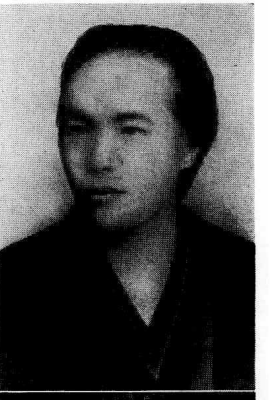


昭和三十八年七月　鎌倉扇ヶ谷の自宅にて　里見弴

←明治三十三年八月　十三歳

→祖母　靜子（明治三十八年　六十八歳）

→父　武



←母　幸子

→明治四十二年三月　長兄武郎結婚の際　前列右から　母　幸子　武郎の妻　安子　武郎　父　武　神尾光臣夫人　後列右から　神尾毅一　三兄　佐藤隆三　山本直良　長姉　山本愛子　弟　行郎　次姉　高木しま子　高木喜寛　弾

试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

←明治四十一年十月十二日　右から　田中治之助　弾　園池公致　正親町實慶

→明治四十三年七月　上野の美術館前にて
前列右から　武者小路實篤　志賀直哉　細川護立　木下利玄　弾　南薫造　後列右から三人目　柳宗悦　一人おいて　三浦直介　有島生馬

↓昭和二年　鎌倉西御門の自宅にて
右から　弾　三男　湘三　次男　鉞郎　長女　瑠璃子　四男　静夫　長男　洋一　妻

→大正四年

→昭和三、四年頃　銀座「華月」にて
右から　小村雪岱　弦　柳田國男　長谷川
時雨　橋田邦彦　泉鏡花　平岡權八郎

←昭和六、七年頃　赤坂檜町の母
の家にて　前列右から　弟　行
郎　次兄生馬の妻　信子　次姉
高木しま子　佐藤豐子　弦　中
列右から　高木喜寛　長姉　山
本愛子　次兄　生馬　後列右か
ら　妻　まさ子　三兄　佐藤隆
三　行郎の妻　章子

↓昭和二十六年十月末
松竹大船撮影所にて
右から　弦　志賀直哉
小津安二郎　廣津和郎

←昭和三十二年七月十九日　後樂園野球場に
て　里見弦古稀、大佛次郎還暦祝文壇野球
戰の際　右から　大佛次郎　弦

昭和三十五年　長與善郎

→父　專齋

←五、六歳頃

→明治三十一年頃　南山小學校在學中

→明治四十二年頃　前列右から
四兄　岩永裕吉　母　園子　善
郎　長兄　稱吉　後列右から
三兄　又郎　次兄　程三

↓明治四十四年
東京帝大入學當時

←大正四年　赤坂臺町の自宅にて　右から　妻　茂子　長女　惠美子　善郎

←大正七年　鎌倉腰越の長兄稱吉の別莊にて　前列右から　岸田劉生　武者小路實篤　後列右から　妻　茂子　善郎　園池公致

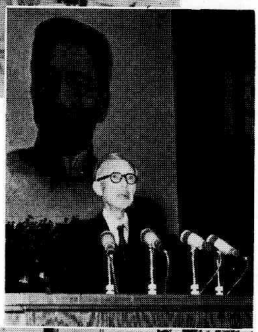
←昭和十年　鎌倉の福島邸にて　中列右から　福島繁太郎　福島慶子　妻　茂子　梅原夫人　後列右から　梅原龍三郎　善郎　武者小路實篤

←昭和十二年夏　赤城山にて　右から　善郎　猪谷千春　次女　萬里子　猪谷六合雄　妻　茂子　長女　惠美子

←昭和二十五年十一月十五日　倉敷の大原美術館にて　前列右から　志賀夫人　柳兼子　大原夫人　安井夫人　妻　茂子　梅原夫人　後列右から二人目　河井寛次郎　善郎　志賀直哉　梅原龍三郎　柳宗悅　武者小路實篤　安井曾太郎　濱田庄司　大原總一郎　富永惣一

→昭和二十八年　オランダ　クレラーミューラー美術館の「ゴッホ百年記念展」會場にて　左　宮田重雄

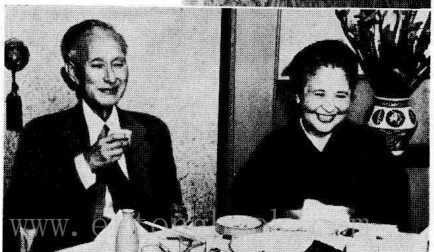
↓昭和三十年四月　クラブ關東にて　「心」同人と　前列右から　武者小路實篤　善郎　辰野隆　梅原龍三郎　小宮豐隆　後列右から　和辻哲郎　一人おいて　天野貞祐　田中耕太郎　大内兵衛　小泉信三　安倍能成　嘉治隆一



→昭和三十一年十月十九日　北京　魯迅二十周年記念大會にて

↓昭和三十三年九月六日　古稀祝宴の席で　右　妻　茂子

←昭和三十三年　輕井澤の梅原邸にて　前列右から　人目　梅原龍三郎　善郎　妻　茂子　梅原夫人



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

里見弴集目次

筆蹟

善心悪心……五
失はれた原稿……三五
ひえもんとり……三四
慾……三九
小暴君……四五
雙女四景……五八
金……六八
二人の作家……九二
同　類……九九
初舞臺……一一五
極樂とんぼ……一三五
春の水のぬるむが如くに……一八三
青春回顧……一八六
作品解説……本多　秋五　四一三
里見弴入門……瀬沼　茂樹　四一九
年　譜……四二七
參考文獻……四四五

長與善郎集　目次

筆蹟

竹澤先生と云ふ人……三一
五祖と六祖……三六
三絶……三七
近事消息の一片……四〇
天皇論……四〇
作品解説……本多　秋五　四一六
長與善郎入門……瀬沼　茂樹　四三
年譜……四三六
参考文献……四四六

里見弴集

刑部尚書

王文

[illegible]

善心惡心

てきぱきしない昌造の性分では、種々な對象との間に結ばれた困つた關係が、根を斷たれないで、いつまでも、ぐづり〳〵尾を引いて殘つた。さういふ幾條かの尾に纏はられて、彼の生活が次第に息苦しく、隨つて活氣も失はれて來た。彼にはそれを可なり切實に感じることは出來た。悶搔いて、そこから浮びあがらうと希ふ心も決して弱くはなかつた。たゞそれを實行に持ち來たす意力の點になると、全くだらしがなかつた。こゝに問題は元に還る、――昌造は若いに似合はず、誠にてきぱきしない、齒切れの惡い青年である、と。

二十五歳の春、彼は、今度こそいよ〳〵今までの生活からすツぽり蟬脫して了はうと計畫した。第一に始末をつけなければならないのは、或る年上の女との關係だつた。それは案外にも容易く成就されたが、その顚末は玆には省く。次には、もう一人の年上の女、お京との關係だつた。

ところで、彼には、「俺はもうお前がいやになつた」と、女に面と向つて言ひ切るだけの勇氣は未、さう考へる勇氣さへもなかつた、――からして、さうは考へなかつた。

相手が自分に對して好意をもつてゐると考へられる間は、誰に限らず、こつちからその人に對して惡意を抱くことの出來にくいのが、彼の性分の一つだつた。而も、その女とは、ともかくも三年越しの關係だつた。そこで、彼がいやで堪らなくなつた「生活」といふもののなかから、その女だけは全く控除されてゐた。實際彼にはその女に對してまだなか〳〵未練もあつたが、それよりも、自分のはうから先に相手が嫌ひになり、隨つてまた、その女から薄情者のやうに思はれ、さう記憶されることのはうが更に辛かつた。別れて了つた後までも、女の胸のなかで、懷しい昔の戀人として永く生きてゐたい慾があつた。そこで「生活を一變する」といふ漠然とした考へから發して、女とのこれまでの關係を續けるといふことが、勢また不可能になるといふ結論へと自分を導いたのだ。併し彼は夢にもさう意識的に工らんだ覺えはない。そんな悖德（？）なことを自分の考へとして考へ得るだけの勇氣があるくらゐなら、もつと手ツ取早く事が運ぶ。自分を悖德漢なりと意識することを恐れる彼は、その恐れてゐるといふことをも意識に上せないでゐる。かういふ融通の利くあたまを必ずしも狡猾と譏ることは出來ない。――それよりももう少し惡い「怯懦」と呼ぶはうが、もつと適切である。だから、彼は自分を、お目出度いほど善い人間だと思つてゐられた、――決してほじくらうと試みなかつた或る微かな不滿足な心持を除けば。さうだ、さうして彼は慥にお目出度いほど善い人間なのだ。――たゞ、だいぶ卑怯なだけで。そしてまた、ひとのいゝ人間には、多くの場合、大抵かやうな弱點が伴ふのを常とする。

この女と、決して再び會はないつもりで別れて來る、歡ばしかるべき日は、實際彼にとつてずゐぶん悲しかつた。房事と飲酒とでひどく衰弱してゐたあたまは、可なり感傷的に傾いてゐたとは言へ、彼は永い間疊の上に泣き伏して、何年たつたらこの悲みが忘れられるだらうと思つたりした。イゴイストなる彼は、別れて行く自分を潔くするために、同時にまた善良なる彼は、女の幸福のために、それまでに女から立替へて貰つた遊蕩費の二三倍にも當る金を女に贈ることにした。それをもつて女が、ひどい商賣に繫がれてゐる身の自由を購ふことが出來るだけ多く。

そのために昌造はかういふ犧牲を拂つた。

四月中旬の埃立つた日だつた。彼は定期預金の證書を懷中にして京橋の銀行へ向つた。この預金は、名義上にも事實上にも彼に屬したものではあつたが、彼自身の勞苦とは全く無關係に、祖母から傳はつた遺產の一部だつた。その上、それは實印と共に、堅く母親の保管の下に置かれてあつた。その朝、母親の留守中にそつとその證書を取り出し、裏書をして、實印を捺した彼は、いかに自ら辯護しても、懷中してゐるものと、「贓品」といふ意識とを引き離すことは出來なかつた。鉛のやうな罪の感じは胸いつぱいになつて、時々體が微かに顫へるのを覺えた。勿論それは決行する前から當然覺悟されてゐた筈である、——その盜みであることは。それにしても、この胸の暗さは全く豫想外だつた。

「お出しになるのですな」

出納掛の男は彼の顏を見ながら確めた。いま彼の運命の毬が、この生若いへツぽこ行員の手に握られてゐると思ふと、彼は忽ち自分の顏から血の氣の引いて行くのが感じられた。

「さうです」と喰ひ扼つた齒の間から纔かに答へる。暫くして、

「これはと、なんですな」別な行員が停車場の出札口のやうな穴へ顏を差し出して言つた。「これはつい先達書き變へになつて居りますが」

「はア、期限前だと出せませんのですか」彼はもうそれを證書の儘で返して貰ひたくなる。もうこのうへ恐しい瞬間に堪へきれなくなつて來たのだ。

「いえ、さういふことはありませんが、たゞ利子が大變御損になりますが、それさへ御承知でしたら、こちらはいつでもよろしいので」

彼は危機が去つたのを感じると急に圖々しくなつて、ひと思ひに承知の旨を答へて了つた。ほどなく札の束を握つた時に、彼にはもう犯罪人らしい自棄くそな度胸が据つて、すぐその足で、女の手へ渡して貰ふ約束になつてゐる友達のうちへ、それを屆けた。一時間ほどの後に、彼は十四五の時分から買ひ集めてゐた錦畫を擁へて、今度は顏馴染の古道具屋の店に現はれた。そこで、まるで踏みつけられるやうな想ひを我慢しながら、愛着の深い祕藏の品を二束三文で金に換へた。盜んだ金で義理以上の慈善をなした彼は、まだその上にも、こんな血の出るやうな金を、女やその周圍の者ども（度々彼を陰險な手段で苦しめた者ども）に贈らうとする。それで別れの記念になるやうな品を調へて貰ふことを賴まうとして、また以前の友と、今度は出先に近いミルクホールで落ち合つた。盜んだ金の一文も自分の手には殘らず、總ての計畫がひとまづ滯りなく片づいたので、彼の心は今やゝ落ついてゐた。そして、この大きな犧牲の報酬として、彼は二度と再び言葉も交さない筈の女と、電話で話すだけの釋辯を、自分自身に對して拵へた。そのミルクホールの帳場に近い電話口で、友達が呼びだしてくれた女と、何か、この大きな犧牲の報酬としては甚だ平凡なことを二分間ほど話し合つて、滿足して電話を切つた。

前からの約束があつて、友達と別れると、その足ですぐ帝國劇場へ、そこで兩親や兄弟たちと一緒になるために急ぐ。或る不愉快な社會劇の幕が明いてゐて、扁平な頭をした畸形兒のやうな子役が、彼と同じ名の少年の役を勤めてゐる。この少年に何か惡い遺傳が現はれて來るらしい場面が演じられてゐた。

「昌造さん、あなたまア……」甲高な女優の聲が響く。——その一日種々な、色の濃い刺戟に惱まされた彼の神經は、哀に瘦せ細つてゐた。恰度聲がはりの時期にゐる畸形兒のやうな少年が、頻りに昌造々々と呼ばれるたびに、彼は腹も立たないで、擽つたいやうな、泣き出したいやうな氣持になつて了つた。やがて、時間を見計らつて家の者に別を告げると、すぐ新橋の停車場へ行き、そこから彼は、逃げるやうに京都への旅にのぼつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com